

平成二十二年前期日程 入学試験問題

小論文 A

人文学部 人文コミュニケーション学科

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙には(その一)と(その二)があります。解答はそれぞれの解答用紙の指定の欄に縦書で記入しなさい。
- ③ 受験番号は、それぞれの解答用紙の指定の欄に算用数字で横書しなさい。
- ④ 問題一、問題二のいずれにも解答しなさい。
- ⑤ 試験時間が終了したら、解答用紙の受験番号の書いてある面を上にして、(その一)を(その二)の上に重ねて監督員の回収を待ちなさい。

問題一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

フランスの北東部ピカルディ地方のエーヌ県に、クシーという名高い古城址がある。十世紀にさかのぼるこの城主たちは、しばしば王権に反抗し、十一世紀においては「太つちよ」と呼ばれたルイ六世（一〇八一—一一三七）の^②あり、また、きわめて誇り高い家銘を持っていたことで知られている。曰く――

ガンキョウ

な反抗者で

Roy ne suis

王ナラズ

ne prince ne duc,

王子ナラズ公ナラズ

ne comte aussy;

伯ニモアラズ、我ハタダ

Je suis sire de Cincy.

くしーノ領主。

このような矜持はいつたい何に基づいていたのであろうか――とは誰しもが抱く疑問であろう。なるほど、彼らは王を王とも思わなかつたし、その一人ラウルのごときは、フランス王フィリップ・オギュストと、イングランド王で「獅子ノ心」といわれた有名なりチャードの率いた第三次十字軍に従い、イエルサレムに近い名高いアッコンの包囲戦で名誉の戦死をとげている（一一九一年）。しかし、このような家の歴史は、当時の大小諸侯家にとつて、特に珍しいというほどでもない。したがって、クシー家の誇りは別のところに由来していたのである。すなわち、その居城が当時名高い名城であつた、ということによつていのである。

クシー城は、ラン市に近い同名の人口三千くらいの村の丘に築かれた、要害堅固な城であつた。数次にわたる十字軍遠征によつて中近東の進歩した築城術の影響を受け、それまでは幼稚で粗末だつた城塞に一大進展を見せたヨーロッパでも、この城は特に傑出したもので、最盛時には、三重の城壁と二十四の塔を持ち、しかもその壁の厚さは七・五メートルで高さ二十メートル、主楼の高さ五十四メートルという巨大さで、火薬攻撃力のない当時としては文字通り難攻不落の城といつてよい。城主がその

城にこれほどの誇りを持つていたことも、理解できるといふものであろう。

もつとも、城の運命はあまり芳しいものではなく、一六五二年には宰相マザランの命令で爆薬を仕掛けて破壊され(ただし、その一部だけである)、一六九二年には珍しくも大地震があつて大部分が崩壊した。以後二百数十年廢墟きよと化していたずらに名のみ高かつたこの城は、第一次大戦にドイツ軍に占領され、ついで反撃に出たフランス軍に迫られて退却するとき、彼らは主楼に爆薬を仕掛けて、この名城に止めを刺してしまった(一九一七年三月)。しかもその爆薬の量は二万八千キログラムだつたといふ。

A かつては公伯何するものぞ、クシーの城主であれば充分、といわしめたこの城の運命は、城といふものの有りようを象徴しているものではなからうか。

*

(注二) 戦前に教育を受けた人々によく知られている話に、大楠公おほなぬの赤坂・千早城攻防戦がある。

元弘元年(一二三二)八月二十四日、かねて討幕計画を進めていた後醍醐天皇だいていそは、京都を脱走して東大寺に行幸、ついで二十七日には笠置山かさぎを行宮あんぐうとされる。しかし、六波羅軍(注三)の追跡は厳しく、翌月の二十八日にはここを焼かれて、わずかに万里小路藤房・季房兄弟に守られて笠置を落ち、間もなく幕兵にとらえられて、十月三日には六波羅へ⑥

ユウヘイ

される。しかし、その

間に、天皇方とひそかに連絡していた楠正成は、九月十四日に下赤坂城(注四)で挙兵する。天皇ユウヘイに成功した六波羅方は、十月十五日大挙して赤坂城を攻める。「俄二拵にわかヘタリト覚エテ、ハカバカシク堀モホラズ、僅力わずニ堀一重塗テ、方一二町二八過ギズト覚エタル其内ニ、櫓やぐら二三十ガ程擲な並ベタ」この城を見て、三手に分れて仰々しく押し寄せた幕府の大軍は、片手に載せて投げ出せそうな城と城兵を嘲笑する。しかし、実際に嘲笑されるのは彼らの方であつて、或時は堀際で奇兵戦術にかかり或時は大石大木に打たれ、また或時は堀底の切岸の下で熱湯を浴びせられる、という有様である。ついに城内への水の補給路を見出した幕兵が、この水ノ手を断ち切ることによつて、智謀またなき正成に守られた赤坂城も一週間目には自落する。

ところが、死んだと思われていた正成は、半年もたたぬ元弘二年(一二三二)四月にたちまち赤坂城を取り戻し、さらに十一月

(注五)

には赤坂城の詰ノ城である金剛山の千早城に[◎]

抛

(注六)

つて、吉野に兵を挙げた護良親王に応じた。幕府側では前にも勝る大軍で元弘三年閏二月これを攻めるが、正成得意の戦術で散々に翻弄され(これらについては『太平記』卷三・卷七に面白く描かれている)、持久戦になつたまま三カ月も空しく送っているうちに、天下の形勢は変わり、足利高氏は丹波で、新田義貞は上野でというふうに、陸続と反幕府軍が挙兵し、五月二十一日幕府は滅びる——という周知の史実は、じつは私の記述の目的ではない。私がいいたいののは、先のクシーといい、この赤坂・千早城といい、城の使命ないし運命といったものをよく示している、ということである。

*

すなわち、一、城というものは(逆説のようであるが)落ちるものである、といえよう。それを守る者が戦の神様と讃えられた楠正成であろうとも、である。二、しかし、いやしくも築城する以上は、まず(千早城のように)天然の要害を第一の頼みとし、さらにそれに加えるに(クシーのように)できる限りの人工施設を加え、(赤坂のように)人智の限りを尽して防御しなくてはならない。三、それでも落城がその本質である以上、これを少しでも妨害するには、その城に対して必ず援軍・あるいは呼応する軍勢がなくてはならない。このいわゆる後詰とか後巻とか呼ばれるものがない場合は、たとえその城が天下の名城大阪城であり、それを守るものが智将真田幸村であろうとも、孤城落月の運命は避けることはできない。大阪落城のときは七歳であつた後の北条流軍学の開祖北条安房守氏長は、その著『慶元記』の中で幸村にいわせている、「凡ソ籠城ノ法ハ隣国ノ援兵待力又ハ小勢ニシテ力敵スベカラザル時ハ止ムヲ得ズ要害ニ仍テ守ル処ノ事也」。すなわち、四、籠城の一つの効能は、兵力の不足を(楠公の場合や氏長のいうように)施設で補うことであるが、五、籠城の本当の使命は、このような追い詰められて仕方なく立て籠もるといった消極的なことにはなく、城を拠点として出撃や謀略を企てて敵の内部を攪乱し、思わぬ時や所で敵側に破綻を生ぜしめる(千早城に見られるように)、というところにあるのである。もしこのような積極性を失うならば、敵の側に生ぜしめたいような事態が、ついにこちらの側に起こってくることになる。だから幸村は続けていう、「然ルニ今度ノ合戦(大阪夏の陣)ハ、日本国ヲ敵ニ請テ援兵ノ来ル頼モナク剩ヘ十万ニ及ブ大軍ヲ持ナガラ近国ニ軍モ不出、大戦ノ一度モ無ク唯ヲメヲメト籠城ヲナシ、後ハ粮尽キ兵器敗シテ城中回忠ノ者又ハ降人等ノ出来テ無敢落城セン」。

つまり、城というものは、城そのものだけではだめなのである。その使命は、飽くまで一つの包括的な作戦の①として、戦局の推移のなかでの総合的戦略の有効な一拠点となればよい。だから、六、ことに戦争の見地から見た場合、たとえばのように堅固に永久的に(クシーのように)築かれようとも、城の本質には臨時性ないし短命性というものがひそかに・しかし厳として存在しているのであって、これが恐らく、どのように堅牢^②な城を訪れても、人々の心のどこかにある種のはかなさを感じさせる原因である。

別の見方をすれば、そもそも戦争というものが戦争をなくすることを目的としている以上、城の使命も城などは不用になる事態の招来を目指していた、といえよう。豊臣氏を滅ぼして天下泰平を志した徳川氏の元和^(注九)一城令や、それに四十年も先立つ織田信長の(大和国^{やまと}にみられる)城割りなども、彼ら政治家の意識とは関わりなく、城^Bそのものの本質にひそむ当然の帰結である、とも見られるのである。

(伊禮正雄『関東合戦記』新人物往来社、昭和四九年、七〇一二頁による)

(注一) 公 公爵。次行の「伯」は、伯爵。

(注二) 大楠公 楠木(楠)正成のこと。子の正行を小楠公と呼ぶのに対して言う。楠公も同じ。

(注三) 六波羅 京都鴨川の東、五条と七条の間の地名。鎌倉時代、幕府がここに六波羅探題を置いたことから、「六波羅

軍」とは幕府軍を指す。

(注四) 下赤坂城 現在の大阪府にあつた城。上赤坂城、下赤坂城の二城があり、総称して赤坂城と呼ぶ。

(注五) 詰ノ城 最終拠点となる城。

(注六) 護良親王 後醍醐天皇の皇子。

(注七) 足利高氏 足利尊氏の前名。

(注八) 夏の陣 正しくは冬の陣。慶長一九年(一六一四)豊臣秀頼の拠る大阪(大坂)城を徳川方が攻囲した戦い。

(注九) 元和 江戸時代初期の年号。

問一



㉔㉕の片仮名を漢字に、また、漢字を平仮名に直しなさい。

問二

傍線部A「かつては公伯何するものぞ、クシーの城主であれば充分、といわしめた」とあるが、それはなぜか、説明しなさい。(六〇字以内)

問三

傍線部B「城そのものの本質にひそむ当然の帰結である」とあるが、なぜそのように言えるのか、説明しなさい。(八〇字以内)

問四

二重傍線部「城の使命ないし運命」について、本文の内容を踏まえ、あなたの考えを述べなさい。(二〇〇字以内)

問題二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もう二十年も前に、ある雑誌が「テレビは終わった」という特集を組んでいたのを覚えているが、テレビが終わるきざしはまったくない。ある通信会社の人が、「携帯電話やネットがこんなに普及しても、若者のテレビ視聴時間は減っていない」と調査結果を見せてくれたことがあった。その人が推理するには、若者は好きな番組の隙間すきを縫うようにして携帯を利用していただけ、ある番組を見るのをまったくやめてしまったりはしないのでは、ということだった。

たしかに、ほとんどの若者はテレビをよく見る。不況で街に活気がなくなつたせいや、自宅がたまり場になることに親が難色を示さなくなつたせいもあり、だれかの部屋に集まってテレビを見たり音楽をきいたり、という遊び方が復活してきたという社会学者の話も聞いた。

今の若者はテレビと独特の距離感Aを保ちながら、つき合っている。大雑把に言えば、七〇年代までは「カメラの向こう」は夢の別世界だった。テレビから流される情報を視聴者は何でも信じ、出演者はあこがれの存在。

ところが、八〇年代後半になると、そのテレビの作り方や裏側を見せる番組が増えてきたり、やらせ問題が相次いで明るみに出たりした。「なんだ、テレビってこうやって作られているものか」というからくりによくの人は気づき、「これもやらせじゃないの」と醒めた目で見えるようになった。すべての人が制作サイドの視点にまわつた、とも言える。

しかし、九〇年代になりバブルが崩壊し、阪神大震災、オウム真理教事件などの大災害、大事件が続くと、だれもが「私はプロデューサー」という余裕の態度でテレビを見られなくなった。「テレビは終わった」と言い続けながらも、「テレビでも見るしかない」あるいは「見ずにはいられない」という状況が再びやって来たのだ。

そういった時代を通過して、今の若者たちはテレビを決して特別視してはいないが、かと言ってプロデューサー的に相対化してそれを見ているわけでもない。日常の知り合いや職場の話題とほとんど地続きに、テレビドラマの話やお笑いタレントの話をはじめ。現実からテレビの話へ、どこでスイッチングしたか、うっかりすると聞き逃してしまうほどだ。

テレビやテレビタレントを特別視していない、という点はよいのだが、ここまで日常とテレビを同じ地平の上で語ってよいのか、と不安になることもある。「どこまでが現実で、どこからがテレビの中の作りもの」と判断するだけの検閲機能を、若者たちは失ってしまったのではないだろうか、と。

テレビを作る側にとっても、これは不思議な感覚のようだ。あるタレントと仕事をしたときに、「昔のように外でもジロジロ見られたり騒がれたりすることはなくなったのはいいんだけど、いきなり友だちみたいに「このあいだの意見だけさ」と話しかけてくる若い人が増えたのは困惑する」という話を聞いたことがある。モニターの向こうとこちら、その境目が限りなくあいまいになっているのだろう。たしかに、バラエティ番組でも一般の若者の恋愛のプロセスをドキュメンタリーっぽく流すなど、作りものかそうでないのか、あえてわからなくしているものがここ数年、急激に増えた。

そのうち多チャンネル化がすすみインターネット放送が普及すると、テレビの向こうと日常の境目は完全になくなり、一般人もモニターの中に自由に出たり番組を制作したりできるようになるのかもしれない。しかし、そこで問題になるのは、だれかが意図的にかたよったメッセージを放映し、見ている若者がそれを「これも現実」と受け入れてしまう危険があることだ。それとも、^Bテレビを作る側も、最初から「現実もテレビも同じこと」と思い込んでいる若者の世代になれば、その危険はなくなるのだろうか。あたりまえで今や大したことないものになってしまったが、これまでにないほど日常に浸透しているテレビを、意識的に悪用しようとする人が出てこないかどうか、しばらくは大人の監視も必要かもしれない。

(香山リカ『若者の法則』岩波新書、平成十四年、四八〜五一頁による)

問一 傍線部A「独特の距離感」とはどういう距離感か。わかりやすく説明しなさい。(八〇字以内)

問二 傍線部B「テレビを作る側も、最初から「現実もテレビも同じこと」と思い込んでいる若者の世代になれば、その危険はなくなるのだろうか」とあるが、これについて具体例を挙げつつあなたの考えを述べなさい。(二〇〇字以内)